

『東瀛詩選』における兪樾の修改

——大窪詩仏・大沼枕山の所収詩について——

郭 穎

はじめに

本稿では、兪樾（一八二一～一九〇七）の『東瀛詩選』に八十六首が収録されている大窪詩仏（一七六七～一八三七）と大沼枕山（一八一八～一八九二）の詩について、兪樾が底本としたと思われる両者の詩集『詩聖堂集』と『枕山詩鈔』との異同箇所を検討する。

一 大窪詩仏

大窪詩仏は、名を行、字を天民といい、詩仏・瘦梅・詩聖堂などと号した。常陸（茨城県）の人である。江戸で、山本北山（一七五二～一八二二）に、古学・朱子学・陽明学の折衷学を習い、詩を市河寛斎（一七四九～一八二〇）に学んだ。頼山陽（一七八〇～一八三二）や画家の谷文晁（一七六三～一八四〇）などと親交があり、一七九二年に、柏木如亭（一七六三～一八一九・瘦竹と号

した）と「二瘦詩社」を開いた。当時、菊池五山（一七六九？～一八四九？）と並んで詩壇の中心をなし、市河寛斎・柏木如亭・菊池五山と共に「江戸の四詩家」と呼ばれている。

（二）兪樾の評価

『東瀛詩選』の序に、兪樾は「傳之既久而梁星巖・大窪天民諸君出、則又變而抒寫性靈、流連景物、不屑以摹擬爲工。而清新俊逸、各擅所長。殊使人讀之、有愈唱愈高之歎。」（之を傳ふること既に久しくして梁星巖・大窪天民の諸君出づれば、則ち又た變じて性靈を抒寫し、景物に流連し、摹擬を以て工と爲すを屑しとせず。而して清新俊逸にして、各おの長ずる所を擅にす。殊に人をして之を讀みて、愈いよ唱へて愈いよ高きの歎有らしむ。）とあり、大窪詩仏と梁川星巖が、護國派に代わって、新しい詩風を開く重要な役割を果たしたことを指摘している。

更に、『東瀛詩選』の卷十九では、

字天民、常陸人。著有『詩聖堂集』初編十卷、二編十三卷、三編十卷。（字は天民、常陸の人なり。著に『詩聖堂集』初編十卷、二編十三卷、三編十卷有り。）

天民以詩佛自號、而以詩聖名堂。蓋欲以一瓣香奉少陵也。然其詩初不甚學杜詩、境頗超逸、有行雲流水之致。東國自享保以後、作詩者多承明七子之餘習、以摹擬剽竊爲工。天民起而掃之。風會爲之一變。宜其在當時之奉爲詩佛矣。（天民は詩佛を以て自ら號し、而して詩聖を以て堂に名づく。蓋し一瓣の香を以て少陵に奉らんと欲するなり。然れども其の詩は初め甚だしくは杜詩を學ばず、境頗る超逸にして、行雲流水の致有り。東國は享保より以後、詩を作る者多く明七子の餘習を承け、摹擬剽竊を以て工と爲す。天民起りて之を掃ふ。風會之の爲に一變す。宜なり其の當時に在り奉りて詩佛と爲すや。）

と詩仏を評価している。

(二) 愈樾の修改

(1) 平仄上の修改

・第51首「弔雲泉墓、墓在淨法寺後山」：一身化作越山雲、雲去雲來每憶君↑思

・第57首「獻小不二於大納言日野公並係之以詩」：不二峰高摩九霄、上來太古雪未消↑有

第51首「一身化作越山雲、雲去雲來每憶君。」（一身化して越山の雲と作り、雲去りて雲來たり毎に君を憶ふ）の下句の「憶」は、原詩では「思」に作る。この詩は七言絶句で、第六字目は仄声でないといけないので、改めている。

第57首「不二峰高摩九霄、上來太古雪未消。」（不二峰高く九霄に摩し、上は太古より雪未だ消えず）の下句の「來」は、原詩では「有」に作る。この二句は、宋・范成大「小峨眉」（『全宋詩』卷二二六）の「恍然坐我寶巖上、疑有太古雪未消。」（恍然として我を寶巖の上に坐せしむ、疑ふらくは太古より雪の未だ消えざる有るか）を意識したと思われる。しかし、原詩の下句は、前の五字が全部仄聲なので、愈樾は二字目の「有」を平聲の「來」に改めたと思われる。

(2) 表現上の修改

(A) 不適切な表現の訂正

・第3首「客夜」：身寄孤亭裏、逢秋容易殘↑秋逢

・第7首「題竹石道人畫竹」：人之寫竹寫其形、形似未能脫塵垢↑免

・第16首「漁蓑」：換酒又愁明月雨、眠花猶帶昨宵香↑當

・第17首「題上田土屋生二松軒」：醒來欹枕仔細覓、始知聲自松梢生↑聲自松梢倩風生

・第17首「題上田土屋生二松軒」：萬木枯盡欲無氣、二松依然青淩霄↑綠

・第25首「楊貴妃櫻」：誰信海山三島外、人間別有太真妃↑除非

・第29首「宿神奈川」：二十年前宿此樓、風波三日使人愁↑留

・第35首「三島」：古驛西偏接翠嶠、秧歌聲裏雨聲收↑痕

・第44首「玉池精舍二十詠」清淺池：澄徹可見底、足浸梅花影↑看

・第45首「玉池精舍二十詠」納涼亭↑橋

・第50首「森岡鶴立齋蘭室二君、會都下諸名勝於百川樓、賦此贈之」：喧嘩人已醉、杯盤還雜陳↑雜還

・第56首「柳」：千絲萬縷翠含春、影滿池心漲麴塵↑蘇

・第70首「林樾宇先生送菊花一瓶云所自培養、賦此奉謝」↑之

・第76首「庚寅元旦」：屠蘇到手覺稍早、爲是杯行少一人↑些

・第83首「入江江民邀与宏庵溪華槐庵閑齋竹潭諸君、同

泛湖賦即事廿六韻」：歸鴉遲遲收、或嫌歸路速↑看看

第3首「身寄孤亭裏、逢秋容易殘。」（身を寄す孤亭の裏、秋に逢ひて容を殘ひ易し）の下旬の「逢秋」は、

原詩では「秋逢」に作る。白居易「初入香山院對月」《全唐詩》卷四五六の「老住香山初到夜、秋逢白月正圓時。」

（老いて香山に住まんとして初めて到る夜、秋に逢ふ白月の正に圓なる時に）のように、「秋に逢ふ」という表現が普通である。「秋逢」（秋に逢ふ）だけでは、何に逢うのか不明なので、「逢秋」に改めたと思われる。

第7首「人之寫竹寫其形、形似未能脫塵垢。」（人の竹を寫すは其の形を寫すなり、形似るも未だ塵垢を脱する能はず）の下旬の「能」は、原詩では「免」に作る。例えば、白居易「金鑾子晬日」《全唐詩》卷四三二の「慚非達者懷、未免俗情憐。」（慚らくは達者の懷に非ずして、未だ俗情の憐を免れざるを）のように、「未免」は、「免れることができない」の意であり、原詩の「未免脫塵垢」だと、俗っぽさから脱出することを免れることができる、つまり俗から脱するという意味になってしまう。これでは、詩句の意味が違ってしまうので、愈樾は「未免」を「未能」に改めている。

第16首「漁蓑」の「換酒又愁明月雨、眠花猶帶昨宵香。」（酒に換ふるも又た愁ふ明月の雨、眠る花猶ほ昨宵の香を帶ぶ）の上旬の「換」は、原詩では「當」に作る。上旬は詩人が漁蓑を質入れて酒に換えたいが、雨が降

ることも心配しているという意味である。しかし、「當酒」だと、「酒を質入れする」という意味になってしまふ。「換酒」は、李白「醉後贈從甥高鎮」（『全唐詩』卷一六九）の「且將換酒與君醉、醉歸託宿吳專諸。」（且く將に酒に換へて君と酔ひ、醉歸して吳の專諸に託宿せんとす）などにも見られる。

第17首「醒來欹枕仔細覓、始知聲自松梢生。」（醒めて來たり枕を欹てて仔細に覓め、始めて知る聲の松梢より生ずるを）の下句は、原詩では「聲自松梢倩風生」（聲は松梢よりして倩風生ず）に作る。原詩のままだと、「生」じるのは、「聲」か「倩風」か分からないので、愈樾は意味が明白になるように改めている。

第17首「萬木枯盡欲無氣、二松依然青淩霄。」（萬木枯れ盡くし氣無からんと欲し、二松依然として青くして霄を淩ぐ）の下句の「青」は、原詩では「緑」に作る。白居易「齊物二首」其一（『全唐詩』卷四三〇）の「青松高百尺、綠蕙低數寸。」（青松 高きこと百尺、綠蕙 低きこと數寸）のように、中国の詩人は松を描く時、「青松」の語を用い、「緑」の字は使わない。

第25首「誰信海山三島外、人間別有太真妃。」（誰か信ず海山三島の外、人間別に太真妃の有るを）の上句の「海山」は、原詩では「除非」に作る。「除非」は「しらない限り」や「しは別として」の意味なので、原詩の「誰信除非三島外」は「除非」の誤用で、意味不明となる。だから、愈樾は下句の「太真妃」に合わせ、白居易「長恨

歌」（『全唐詩』卷四三五）の「忽聞海上有仙山、山在虛無縹緲間。」（忽ち聞く海上に仙山有り、山は虚無縹緲の間に在りと）の部分で踏まえ、「除非」を「海山」に変えたと思われる。

第29首「二十年前宿此樓、風波三日使人愁。」（二十年前此の樓に宿り、風波三日人を愁へしむ）の「愁」は、原詩では「留」に作る。例えば、柳惲「搗衣詩」（『玉台新詠』卷五）の「行役滯風波、游人淹不歸。」（行役風波に滯り、游人淹しく歸らず）、謝惠連「西陵遇風獻康樂」（『文選』卷二十五）の「臨津不得濟、佇楫阻風波。」（津に臨みて濟るを得ず、楫を佇めて風波に阻てらる）のように、「風波」は「滯・阻」と一緒に使うのが一般的である。原詩の「風波」が人を「留」めるというのは常用表現ではないので、押韻を考慮し、「留」を「愁」に変えたと思われる。

第35首「古驛西偏接翠疇、秧歌聲裏雨聲收。」（古驛西に偏りて翠疇に接し、秧歌の聲裏 雨聲 収まる）の下句の「聲」は、原詩では「痕」に作る。例えば、杜甫「返照」（『全唐詩』卷二三〇）の「楚王宮北正黃昏、白帝城西過雨痕。」（楚王の宮北正に黃昏、白帝の城西過雨の痕）や、宋・楊萬里「飯罷登山」（『全宋詩』卷二二八二）の「樹遠通鶯響、花晴帶雨痕。」（樹遠くて鶯響を通じ、花晴れて雨痕を帶ぶ）のように、「雨痕」は、雨の迹の意味であり。原詩の次句は、「淺間祠下一泓水、散作千村万落秋。」（淺間祠下一泓水、散じて千村を万落の

秋と作す」とあり、雨が降り続いていることを描いている。しかし、原詩の「雨痕収」だと、雨が止む意味になつてしまふので、兪樾は「痕」を「聲」に改めた。

第44首「澄徹可見底、足浸梅花影。」（澄徹として底を見る可く、梅花の影を浸すに足る）の「見」は、原詩では「看」に作る。「看底」という言い方は無いので、兪樾はそれを「見底」に改めた。似た表現は、白居易「對小潭寄遠上人」（『全唐詩』卷四五一）の「小潭澄見底、閑客坐開襟。」（小潭澄みて底を見、閑客坐して襟を開く）にも見られる。

第45首「玉池精舍二十詠」の「納涼亭」の「亭」は、原詩では「橋」に作る。例えば、岑參の「陪封大夫宴瀚海亭納涼」（『全唐詩』卷二〇〇）、戎昱の「駱家亭子納涼」（『全唐詩』卷二七〇）、白居易「府西亭納涼歸」（『全唐詩』卷四五一）のように、中国の詩人は亭で納涼することが多い。また、宋・洪皓「次三月望日出遊」（『全宋詩』一七〇一）の「欲作納涼亭、因茲出求木。」（納涼亭を作らんと欲し、茲に因りて出でて木を求む）のように、「納涼橋」より、「納涼亭」のほうが中国人にとつて馴染みがある。

第50首「喧嘩人已醉、杯盤還雜陳。」（喧嘩として人已に酔ひ、杯盤還た雜じり陳る）の「還雜」は、原詩では「雜還」に作る。原詩の「雜還陳」では、意味が不明なので、兪樾は「乱雜」の意味を表す「雜陳」を用いて改めた。枚乘「七發」（『文選』卷三十四）にも「滋味

雜陳、肴糅錯該。」（滋味は雜じり陳り、肴糅は錯じり該る）とある。

第56首「千絲萬縷翠含春、影滿池心漲麴塵。」（千絲萬縷翠にして春を含み、影池心に滿ちて麴塵漲る）の上句の「含」は、原詩では、「蘇」に作る。「蘇春」の表現はないので、兪樾は「含春」に改めた。武后宮人「離別難」（『全唐詩』卷七九七）に「來時梅覆雪、去日柳含春。」（來たる時は梅雪に覆はれ、去る日は柳春を含む）や、宋之問「詠笛」（『全宋詩』卷三三二）の「逐吹梅花落、含春柳色驚。」（吹を逐ひ梅花落ち、春を含み柳色驚く）のように、「含春」は柳とよく一緒に使われている。

第70首の詩題「林樾宇先生送菊花一瓶云所自培養、賦此奉謝」の「此」は、原詩では「之」に作る。ここでは、本詩をさし、「此」のほうがいいので、「之」を「此」に改めたと思われる。

第76首「屠蘇到手覺稍早、爲是杯行少一人。」（屠蘇手に到りて稍や早きを覺え、爲に是れ杯行に一人少し）の上句の「稍」は、原詩では「些」に作る。しかし、例えば、宋・楊萬里「樊京」（『全宋詩』二三〇六）の「可惜一盃金屑酒、飲來祇較早些時。」（惜む可し一盃の金屑酒、飲みて來たり祇だ較や早些の時）のように、「早些」の表現が正しい。兪樾は平仄も考慮し、「稍早」に変えたと思われる。なお、『東瀛詩選』卷三十所収の山田信の「七月望圓融寺賞月」の「酒醒稍覺些寒侵、蓮華漏盡夜沈沈。」（酒醒めて稍や覺ゆ些寒の侵すを、蓮華漏れ

盡くし夜沈沈たり」の「些寒」も、愈樾は「薄寒」に改めている。

第83首「歸鴉遲遲收、或嫌歸路速。」（歸鴉 遲遲として收め、或いは嫌ふ 歸路の速きを）の上句の「遲遲」は、原詩では「看看」に作る。例えば、羅隱「寄韋贍」（『全唐詩』卷六六二）の「風催曉雁看看別、雨脅秋蠅漸漸癡。」（風は曉雁を催して見る見る別れ、雨は秋蠅を脅かし漸漸として癡なり）のように、「看看」は「見る見る」、「次第に進む」という意味である。しかし、下句の「或嫌歸路速」との繋がりがよくないので、愈樾は文意を考えて、「看看」を「遲遲」に改めたと思われる。「夕方の鳥はゆつくりとねぐらに向かつて飛んでいる」としたほうが、下句の「皆ともっと楽しみたいから早く帰りたいくない」という気持ちと合う。

（B）厳格な対句への修改

・第50首「森岡鶴立齋蘭室二君、會都下諸名勝於百川樓、賦此贈之」：賞心兼樂事、美景又良辰↑屬

第50首「賞心兼樂事、美景又良辰。」（賞心 兼ねて樂事、美景 又た良辰）の下句の「又」は、原詩では「屬」に作る。例えば、白居易「得楊湖州書頗誇撫民接賓縱酒題詩因以絕句戲之」（『全唐詩』卷四五七）の「豈獨愛民兼愛客、不唯能飲又能文。」（豈に獨り民を愛するのみな

らんや兼ねて客を愛す、唯だ能く飲むのみならず又た文を能くす）、李商隱「春日寄懷」（『全唐詩』卷五四一）の「縱使有花兼有月、可堪無酒又無人。」（縱使ひ花有り兼ねて月有りととも、酒無く又た人無きに堪ふべけん）のように、「兼」と「又」が対になることが多いので、愈樾は下句の「屬」を「又」に変えたと思われる。

（3）削除

第50首「森岡鶴立齋・蘭室二君、會都下諸名勝於百川樓、賦此贈之」の原詩は、次のようである。

- | | |
|----------|-------------|
| 1 仲氏如孤鶴 | 仲氏は孤鶴の如く |
| 2 卓立在雞群 | 卓立して雞群に在り |
| 3 叔氏如幽蘭 | 叔氏は幽蘭の如く |
| 4 一室爲之薰 | 一室 之のため薰る |
| 5 二君雖在官 | 二君は官に在りと雖も |
| 6 不染官途塵 | 官途の塵に染まず |
| 7 所以繪畫手 | 所以に繪畫の手 |
| 8 入妙又入神 | 妙に入りて又た神に入る |
| 9 文化丙子歲 | 文化丙子の歲 |
| 10 二月之中旬 | 二月の中旬 |
| 11 設宴江樓上 | 宴を設く江樓の上 |
| 12 大會書畫人 | 大いに會す 書畫の人 |
| 13 人人爭呈伎 | 人人 争ひて伎に呈す |

- 14 坐間生雲煙 坐間 雲煙 生じ
 15 喧嘩人已醉 喧嘩として人 已に酔ひ
 16 杯盤雜還陳 杯盤 雜じり還た 陳る
 17 賞心兼樂事 賞心 兼ねて 樂事
 18 美景屬良辰 美景 屬たま良辰
 19 我亦來與席 我亦 來たりて 席に 與り
 20 作詩聊祝君 詩を作りて 聊か君を 祝ふ
 21 不啻君風流 啻だ君の 風流のみに あらず
 22 實因迺侯賢 實に因る 迺侯の賢きに
 23 公曰汝兄弟 公曰く 汝兄弟と
 24 廣結翰墨緣 廣く結ばん 翰墨の緣

これは、枕山が江戸の高級料亭百川樓で行った畫會で、盛岡藩の絵師、谷文晁の門下の田鎖鶴立齋（一七七三～一八二九）と本堂蘭室（一七七八～一八四三）兄弟と出逢ったことを詠っている。詩の冒頭は、二人が官職に就いていても、俗世間に汚されていない、と兄弟二人の人格を賛美している。原詩では、この次に「所以繪畫手、入妙又入神。」の二句がある。前文との繋がりが悪く、文脈から見ると唐突な感じがする。だから、愈樾はこの二句を削除したと思われる。

その後、宴会の描写部分に入り、皆は絵を描いたり、酒を飲んだりして、楽しんでゐる。もちろん詩人がその場にいなければ、このような細かい描写は困難である。しかし、原詩では、第18句の後に、「我亦來與席、作詩聊

祝君。」の句があつて、主人公「我」が登場している。それに、「祝君」の事については、前文に触れていないので、理解しにくい。だから、愈樾は詩全体の文脈を通りよくするため、この二句を削除したのであろう。

二 大沼枕山

大沼枕山は、幕末・明治期の人で、名を厚、字を子壽といい、東京下谷の人である。詩を菊池五山に学び、梁川星巖の玉池吟社に参加した。そして、大窪詩仏と菊池五山らに認められ、詩名を馳せた。小野湖山（一八一四～一九一〇）・鈴木松塘（一八二三～一八九八）と共に星巖門下の三高足と呼ばれていた。枕山は愈樾より三歳年長で、殆ど同じ時代に生きていた。枕山は若くして詩才をあらわして、詩塾下谷吟社を開き、江戸時代の最後の漢詩人と言われている。明治になつても、終生丁髷を結んでいたという逸話に象徴されるように、時世と隔絶し、詩文の世界に耽っていた。のち、永井荷風が枕山の娘から直接聞いた話を『下谷叢話』に書き記している。

（一）愈樾の評価

大沼枕山について、『東瀛詩選』卷三十一では、

字子壽、號枕山、江戸人。著有『枕山詩鈔』三卷。

(字は子壽、枕山と號し、江戸の人なり。著に『枕山詩鈔』三卷有り。)

枕山於詩學頗近香山一派。其論詩有云、「詩無定法意所屬、不要疏宕要精熟。不古不今成一家、枯淡爲骨菁華肉。」可得其大概矣。東國人詩集、每集必有數序。此集止於卷首、自書「千古寸心」四字、不乞人一序、頗有名貴之氣。(枕山は詩學に於いて頗る香山一派に近し。其の詩を論じて云ふ有り、一詩に定法無く意の屬する所なり、疏宕を要めず精熟を要む。古ならず今ならずして一家を成し、枯淡は骨と爲り菁華は肉たり」と。其の大概を得可し。東國人の詩集、集毎に必ず數序有り。此の集止だ卷首に於いて、自ら「千古寸心」の四字を書し、人に一序も乞はず、頗る名貴の氣有り。)

と枕山を評價している。⁽⁶⁾「千古寸心」は、杜甫「偶題」(『全唐詩』卷二三〇)の「文章千古事、得失寸心知。」(文章千古の事、得失寸心知るのみ)により、文章は永遠不朽の事業であるが、その佳否得失に至ってはただ作者自身の方寸の心を知るだけだ、という意味である。この四文字は枕山の詩風を大いに反映している。

(二) 兪樾の修改

(1) 字数上の修改

- ・第36首「昆溪詩鈔題言」……×↑君不見風流之秦少游、對客揮毫詩力適
- ・第36首「昆溪詩鈔題言」……×↑又不見豪放之郭功甫、筆底光燄凌萬古
- ・第36首「昆溪詩鈔題言」……×↑吾莫逆友曰子肇氏、狂態傲世古之奇士

第36首「君不見風流秦少游、對客揮毫詩力適。」(君見ずや風流たる秦少游、客に對し毫を揮ひて詩力適なるを)と「又不見豪放郭功甫、筆底光燄凌萬古。」(又見ずや豪放たる郭功甫、筆底の光燄萬古を凌ぐを)の上句は、原詩ではそれぞれ「君不見風流之秦少游」、「又不見豪放之郭功甫」に作る。この詩は、殆ど七言の句なので、兪樾は助字「之」を消し、「君」と「又」の下を七字に揃えるようにしている。同詩の「吾莫逆友子肇氏、狂態傲世古奇士。」(吾莫逆の友子肇氏、狂態世に傲る古奇士)の二句も、原詩では、「吾莫逆友曰子肇氏、狂態傲世古之奇士」に作る。兪樾は上下の「曰」と「之」の一字ずつを消すことによって、七言に揃えている。

(2) 表現上の修改

(A) 常套表現への修改

・第10首「鴻臺歌」：相州更有箱根險、五世鴻基一旦亡
↑朝

・第31首「中秋同懷之及田村考叔植村子順東橋買船到棹
月樓、是夜月色奇明、夜半又登某樓、分韻賦此」：十
年幾度逢明月、一夜同遊盡可人↑伴

第10首「相州更有箱根險、五世鴻基一旦亡。」（相州
更に箱根の險有り、五世の鴻基一旦にして亡ぶ）の下句
の「一旦」は、原詩では「朝」に作る。「一朝」も「一旦」
も僅かの間の意味があるが、『史記』卷四十「楚世家」に
「楚倍秦。秦且率諸侯伐楚、爭一旦之命。」（楚秦に倍
く。秦且に諸侯を率ゐて楚を伐ち、一旦の命を爭はん
とす。）とあるように、生死を論じる時は「一旦之命」の
表現が一般的である。原詩の「一朝亡」の表現は、唐宋
詩には未見である。しかし、明代には、例えば、明・彭
年「庚申秋書事」（『明詩綜』卷五十五）の「内廐傳焚廿
四坊、錦雲花隊一朝亡。」（内廐傳へ焚く廿四の坊、錦
雲花隊一朝にして亡ぶ）のように、「一朝亡」の表現が
使われている。

第31首「十年幾度逢明月、一夜同遊盡可人。」（十年幾
度か明月に逢ふ、一夜同遊 盡く可人なり）の下句の
「盡」は、原詩では「伴」に作る。この詩は、中秋の夜、
詩人が友人と月を愛でた時に作った作品である。例えば、
宋・晁補之「廷賢求賦先春亭」（『全宋詩』卷一一三四）
の「築圃名亭盡可人、東皋百卉故先春。」（築圃名亭 盡

く可人なり、東皋百卉 故に春に先んず）、宋・朱翌「冬
至後三日與羅楚入倅廳兩松下梅花盛開取酒酌石臺上思得
名手作松梅圖」其一（『全宋詩』卷一八六四）の「乘閑到
此能終日、與我來遊盡可人。」（閑に乘じ此に到りて能く
日を終ふ、我と與に來たり遊ぶは盡く可人なり）のよう
に、目の前の景色を愛でる時、「盡可人」の表現がよく用
いられている。

（B）厳格な対句への修改

・第35首「戲作勸行樂歌」：人謂色斧伐其性、人謂酒兵
攻其身↑眉

第35首「戲作勸行樂歌」詩の冒頭に、「人謂色斧伐其性、
人謂酒兵攻其身。」（人謂ふ 色斧 其の性を伐つと、人謂
ふ 酒兵 其の身を攻むと）とあり、上句の「色」は、原
詩では「眉」に作る。原詩の二句は、『呂氏春秋』孟春紀
「本生」に「肥肉厚酒、務以自彊。命之曰爛腸之食。靡
曼皓齒、鄭衛之音、務以自樂、命之曰伐性之斧。」（肥肉
厚酒、務めて以て自ら強ふ。之を命けて爛腸の食と曰ふ。
靡曼皓齒、鄭衛の音、務めて以て自ら樂しむ。之を命け
て伐性の斧と曰ふ）を踏まえたと思われる。こつてりと
した肉とたらふくの酒を喰らい、ひたすら自分で自分の
胃腸に負担をかける。それを「爛腸の食」（腸を爛れさせ
る食事）という。美人の玉のような肌と艶かな白い齒、

鄭衛のような淫らな音楽、これでひたすら佚楽にふける。これを「伐性の斧」(天性を切り取る斧)という。「眉斧」は、宋詩以前は未見で、蘇軾の「次韵錢穆父王仲至同賞田曹梅花」(『全宋詩』卷八一九)の「鬢霜未易掃、眉斧真自伐。惟當此花前、醉臥黄昏月。」(鬢霜 未だ掃ひ易からず、眉斧 真に自ら伐る。惟だ當に此の花の前、醉臥すべし 黄昏の月に)に初見する。俞樾は、「酒」との嚴密な対にするために、「色」に改めたと思われる。

(3) 削除

第22首「送彦之」の原詩は、次の通りである。

- 1 吾徒詩社不乏人 吾徒詩社 人乏しからず
- 2 高材逸足皆絶倫 高材逸足 皆絶倫たり
- 3 少年意氣賈餘勇 少年意氣 餘勇を賈り
- 4 筆陳何啻掃千軍 筆陳 何ぞ^た昔だに千軍を掃ふのみならんや
- 5 惜哉未能脫俗好 惜しいかな 未だ俗好を脱する能はず
- 6 正門大路得者少 正門大路 得し者少く
- 7 銅碗龍吟人人同 銅碗龍吟 人人同じくし
- 8 認僞爲真拙爲巧 僞を認め真と爲し拙を巧と爲す
- 9 不知平淡風味存 知らず 平淡に風味 存するを
- 10 勉僻其字異其言 勉めて其の字を僻にして 其の言

- 11 唐宋大家置不問 唐宋の大家は 置きて問はず
- 12 彼明此清妄自尊 彼の明 此の清を妄りに自から尊ぶ
- 13 議論雖大識見隘 議論は大なりと雖も識見は隘く
- 14 井蛙遼豕紛成隊 井蛙遼豕 紛として隊を成す
- 15 何況腐質炫成新 何ぞ況んや腐質 炫^ばりて新を成すをや
- 16 篇篇虛飾非實際 篇篇 虚飾 實際に非ず
- 17 詩道似盛日以衰 詩道 盛んなるに似たれども日びに以て衰ふ
- 18 正始之音有誰知 正始の音 誰か知ること有らん
- 19 豈無二三非常士 豈に無けんや 二三の常に非ざるの士
- 20 支顛扶倒在此時 顛を支へ倒を扶くるは此の時に在り
- 21 鈴氏之子今才雋 鈴氏の子 今 才雋^{すく}れ
- 22 騷壇卓幟天所命 騷壇卓幟 天の命ずる所なり
- 23 古人贈別必以言 古人 贈別に必ず言を以てす
- 24 我有數言子且聽 我 數言有り 子且く聽^{しほ}け
- 25 詩無定法意所屬 詩に定法無く意の屬する所なり
- 26 不要疎宕要精熟 疎宕を要めず精熟を要む
- 27 不古不今成一家 古ならず今ならずして一家を成し
- 28 枯淡爲骨菁華肉 枯淡は骨と爲り菁華は肉たり
- 29 俯仰天地皆新句 天地を俯仰し皆新句

30 森羅萬象供才具 森羅萬象 才具に供ふ

31 行雲流水無粘筆 行雲流水 粘筆無く

32 生意活潑得真趣 生意活潑 真趣を得たり

33 我告吾子蓋止茲 我 吾子に告ぐるは蓋し茲に止め

34 子歸努力有餘師 子歸りて努力せば餘師有らん

「彦山」は「星巖門下の三高足」の一人、鈴木松塘のことである。この詩は、当時の玉池吟社の詩風について詠ったもので、第25〜28句は、愈樾の評価にも取り挙げられていた。第1〜6句は、吟社には人材は少なくないが、本当の詩道を得て、俗っぱさから脱出している人は稀であるという。

次の第7・8句の「銅碗龍吟人人同、認爲爲真拙爲巧」二句は、皎然「蔓銅碗爲龍吟歌」(『全唐詩』卷八二二)を踏まえている。皎然詩の序文に、

唐故太尉房公瑄、早歲嘗隱終南山峻壁之下、往往聞龍吟。聲清而靜、滌人邪想。時有好事僧潛覓之。以三金寫之、唯銅聲酷似。他日房公偶至山寺、聞林嶺間有此聲、乃曰、『龍吟復遷於茲矣。』僧因出其器以告。公命覓之。驚曰、『眞龍吟也。』大曆十三祀、秦僧傳至桐江。予使童兒覓金做之、亦不減秦聲也。(唐の故太尉 房公瑄、早歲 嘗て終南山峻壁の下に隠り、往往 龍吟を聞く。聲 清くして靜なり、人の邪想を滌ふ。時に好事の僧有りて潛かに之を覓たんとす。三

金を以て之を寫すに、唯だ銅聲 酷だ似たり。他日房公 偶たま山寺に至り、林嶺の間に此の聲有るを聞き、乃ち曰く、『龍吟 復た茲に遷れり』と。僧因つて其の器を出だして以て告ぐ。公命じて之を覓たしむ。驚きて曰く、『眞に龍吟なり』と。大曆十三祀、秦の僧 傳ひて桐江に至る。予 童兒をして金を覓ちて之を做はしめ、亦た秦聲に減ぜざるなり。』

とある。玄宗の名臣房瑄は、若い時終南山に隠遁した時、よく龍の鳴き声を聞いていた。物好きな僧侶がいて、龍の鳴き声を真似た音を出そうとした。三種類の金属を試したが、銅だけがよく似ている。ある日、房瑄がたまたまこの寺に來た時、林の奥から音が聞こえた。「龍の鳴き声がここに遷つてきた」のかと思うと、その僧侶が銅碗を出して事情を話した。その軋る音を聞くと、龍の鳴き声そのまま、と驚いた。大曆十三年、長安の僧侶が桐江に來て、その方法を伝えた。皎然は子供に軋らせ方を学ばせ、長安の僧侶に比べても劣らなかつたという。そして、詩に「逸僧蔓碗爲龍吟、世上未曾聞此音。一從太尉房公賞、遂使秦人傳至今。初蔓徐徐聲漸顯、樂音不管何人辨。」(逸僧 碗を蔓ちて龍吟を爲し、世上 未だ曾て此の音を聞かず。一たび太尉房公の賞せしより、遂に秦人をして傳へて今に至らしむ。初め蔓つに徐徐として聲漸く顯なり、樂音 管せず何人か辨ぜん)とあり、龍の本当の鳴き声を聞いたことがないから、銅の軋る音と龍

の鳴き声は区別できなくなってしまう、という。後、李賀も「假龍吟歌」(『全唐詩』卷三九四)の詩を作って、偽物の銅の音を聞いて喜んでゐることを詠み、不正な風潮を批判している。枕山は、以上の故事を用いて、当時日本における、漢詩の真諦を得ず、中国の詩を真似するばかりの現状に喩えている。

しかし、第9・10句の「不知平淡風味存、勉僻其字異其言。」は、上文の漢詩の模倣風潮と直接な繋がりがない。だから、愈樾はそれを削除している。

次の第11・16句の「唐宋大家置不問、彼明此清妄自尊。議論雖大識見隘、井蛙遼豕紛成隊。何況腐質炫成新、篇篇虛飾非實際。」では、「唐宋の大家」を肯定し、明清の詩を尊ぶことを批判している。愈樾は清の人のなので、これらの句に不快を感じ、削除したのであろう。

第39首「中秋同穀堂・香巖・樂山泛舟墨水、訪百花園、薄暮抵棹月樓。此夕月色清佳、分表・倉・山・四・海・共・傳・斯・夕・好爲韻、得四字」の原詩は、次の通りである。

- 1 庾樓袁渚吁遼矣 庾樓袁渚 吁遼あははるかなり
- 2 中秋之遊孰堪記 中秋の遊 孰か記すに堪ふる
- 3 獨數明皇月宮遊 獨り數ふ 明皇 月宮の遊
- 4 霓裳羽衣擅奇事 霓裳羽衣 奇事を 擅はしりまにす
- 5 繼之白傳洞庭遊 之を白傳に繼ぐ 洞庭の遊

- 6 皓月澄波占勝地 皓月澄波 勝地を占む
- 7 豪華天子閒詩客 豪華天子 閒詩客
- 8 其人風流同一致 其の人の風流 同に一致す
- 9 我憶古賢尚有缺 我憶む 古賢 尚ほ缺有るを
- 10 俊遊如此但一次 俊遊 此くの如く 但だ一次なるを
- 11 曷若我遊無虛歲 曷ぞ若かん 我が遊 虚歲 無きに
- 12 月樓已博十回醉 月樓 已に博く十回醉ふ
- 13 今茲中秋暑未銷 今茲 中秋 暑未だに銷えず
- 14 白紵衣霑汗珠膩 白紵 衣 霑ひて汗珠 膩かなり
- 15 泉水橋畔畫船を憫ひ 泉水橋畔 畫船を憫ひ
- 16 一船睦友如昆季 一船睦友 昆季の如し
- 17 船頭載酒船尾絃 船頭に酒を載せ船尾に絃し
- 18 一彈一酌各適意 一彈一酌 各おの意に適ふ
- 19 溯流而東岸之隅 溯流す 東岸の隅
- 20 花園去見秋色媚 花園 去きて見る 秋色の媚ぶるを
- 21 紅衣翩翩萼飄香 紅衣は翩翩として萼は香を 飄ひるがへし
- 22 紫綬若若花弄穗 紫綬は若若として花は穗を弄ぶ
- 23 彷徨不覺曜靈匿 彷徨して覺えず 曜靈の匿るるを
- 24 堤松陣陣遞涼吹 堤松は陣陣として涼吹を 遞つたふ
- 25 卻回呼船截江水 卻回して船を呼び江水を截り
- 26 指點柳樓翠簾翠 指點す 柳樓 翠簾の翠なるを
- 27 我視水西家家樓 我視る 水西 家家の樓

28 甲子太七拔其萃
29 調饌雖精境雖幽

甲子太七 其の萃を抜く
調饌は精なりと雖も境は幽ふかしと雖も

30 受月之方非正位

月を受くるの方は正位に非ず

31 此樓當面桂輪昇

此の樓 當面に桂輪 昇り

32 所以諸子不角拵

所以に諸子は角拵ならず

33 況乃盤飴競時新

況んや乃ち盤飴 時を競ひて新にして

34 羹膾之材殊珍備

羹膾の材 殊に珍を備ふるをや

35 急舉一杯屬諸客

急に一杯を舉げ諸客に屬し

36 百年勝遊天所賜

百年勝遊 天の賜ふ所

37 縱令吟朋少幾人

縱令吟朋に幾人少なきも

38 遊盟豈可中道棄

遊盟 豈に中道に棄つ可けんや

39 夜深江月逗樓心

夜深くして江月 樓心に逗まり

40 儻然不做人間思

儻然として做さず人間の思ひ

41 明年難期好明月

明年 期し難し 好明月

42 敢辭歌舞終宵戲

敢へて歌舞を辭して終宵戯る

43 有唐以來且千年

有唐以來 且に千年ならんとするに

44 人生飄忽真如寄

人生飄忽として真に寄るが如し

45 王侯螻蟻共一邱

王侯螻蟻 共に一邱

46 買歡莫說錢財匱

歡を買ふに錢財の匱しきを説く

47 剩有紅粧苦留客

剩り有る紅粧 苦に客を留め

48 樽前激瀾清酤斂

樽前 激瀾として清酤斂し

49 我曹更恃玲瓏筆

我が曹 更に恃む 玲瓏の筆

50 水調妙詞可幸冀

水調妙詞 幸冀す可し

51 玉京桂殿神欲往

玉京桂殿 神 往かんと欲し

52 比古人遊無羞愧

古人の遊と比ぶるも羞愧無し

53 美景良辰仍賞樂

美景良辰 仍ほ賞樂し

54 此遊一併能得四

此の遊 一併して能く四を得たり

中秋の日、鷺津毅堂（一八二五〜一八八二・從兄弟鷺津

益齋の子）、神田香巖（一八五四〜一九一八・孫は神田喜

一郎）、秋月樂山（一八三四〜一九〇四）と一緒に隅田川

で船に乗り、その後また行樂の場として名高い百花園を

訪ねて、夕方に棹月樓で明月を愛でながら詩を詠ったこ

とを描いている。冒頭の第1〜12句に、古の人々の中秋

賞月は素晴らしかったが、回数が少ないことは残念だと

詠う。それと比べて、今の私は毎年棹月樓で賞月し、既

に十年間くらい続いている。第13〜18句は、隅田川の船

上で酒を飲みながら音樂を楽しみ、第19〜22句は、百花

園の花を描き、第23〜34句は、いつの間にか日が暮れて、

棹月樓に向かつて移動することを詠う。西岸の料亭はい

い場所を占めていて、料理もいいが、月見には角度がよ

くない。それに比べて棹月樓は、真つ正面から月を愛で

ることができ、会席には珍しいご馳走がどんどん出てく

るという。

第35句からが、抒情部分である。詩人は盃を挙げて客

に勧める。こんな宴会は天の賜り物なので、人数が減つ

ていつても、途中で解散することはないという。第39、42句は、「人間思」や「敢辭歌舞」などの表現が晦渋で、分かり難く、第39・40句は抒情からまた叙景に戻り、文脈上の繋がりが悪い。また第41・42句は、前の第11・12句の内容と矛盾している。だから、兪樾はこの四句を削除している。

第43、48句は、人生の無常さを嘆いている。第47・48句の「剩有紅粧苦留客、樽前激灩清酤斂。」は、目の前に一生懸命に客を引き止めている妓女と、盃に溢れている酒があるという意味である。兪樾は妓女に関する表現を好まないで、この二句を削除したと思われる。

終わりに

大窪詩仏の詩においては、不適切な表現に対する訂正が多く見られる。例えば、「秋逢」は「秋に逢う」という日本語の語順そのままだったり、松を形容する時「緑」という日本語の習慣に従ったりするように、詩仏が漢詩を作る時、日本語に影響されていたことが分かった。そして、訓読で混同しやすい「看」と「見」、「此」と「之」の誤用もある。

大沼枕山の詩においては、表現上の訂正は少ないが、削除の部分が比較的多い。それは、枕山が、自分の感情に任せ、思うがままに詩作を行い、詩の流れから逸脱してしまうことが屢々あるからであろう。だから兪樾はそ

れらを削除したと思われる。

引き続き、『東瀛詩選』における兪樾の修改を検討し、その修改を通して見られる江戸漢詩人の特徴を考察してみたい。

注

(1) 『東瀛詩選』における詩順は、『詩聖堂集』『詩集日本漢詩』第八卷 富士川英郎・松下忠・佐野正巳編 汲古書院 一九八五)と『枕山詩鈔』『詩集日本漢詩』第十七卷 富士川英郎・松下忠・佐野正巳編 汲古書院 一九八九)と一致するので、兪樾がそれを底本にして、詩を採録したと言える。

(2) 『東瀛詩選』の避諱による異同箇所は以下の通りである。

・(詩仏) 第53首「小壘谷讀如亭山人題壁之作有感」：將命乞花_レ擇地、賣詩求食每依人_↑寧

・(詩仏) 第77首「飲藤堂琴山大夫邸舍」：老夫六十何辭醉、欲罄年來晤語歡_↑寧

・(詩仏) 第83首「入江江民邀予與宏庵溪華槐庵閑齋竹潭諸君同泛湖賦卽事廿六韻」_↑弘

・(詩仏) 第83首「入江江民邀予與宏庵溪華槐庵閑齋竹潭諸君同泛湖賦卽事廿六韻」：村中千年寺、寺有老比丘_↑丘

・(詩仏) 第83首「入江江民邀予與宏庵溪華槐庵閑齋竹潭諸君同泛湖賦卽事廿六韻」：書法不足觀、年月奚煩搜_↑寧

・(枕山) 第1首「曉發箱根」：世路甯異此、危險何以可說_↑寧

・(枕山) 第37首「山寺觀早櫻用劒南梅花韻」…香幽仍怕微風知、影淡甯嫌初月覬↑寧

・(枕山) 第39首「中秋同毅堂香巖樂山泛舟墨水訪百花園薄暮抵棹月樓此夕月色清佳分袂倉山四海共傳斯夕好爲韻得四字」…船頭載酒船尾絃、一彈一酌各適意↑絃

・(枕山) 第40首「至前看梅花」…其狀奇巧雖窮究、人造安得天造壽↑寧

・(枕山) 第53首「寄題小松元鶴東涯舍」↑玄

・(枕山) 第79首「秋感三首用吳穀人韻」其二…哀吟只擬含風杆、壯志難期破浪舟↑寧

「寧」は清・宣宗旻寧の諱なので、愈櫛はそれを避けるため、「甯」(枕山・第1首と第37首)、「奚」(詩仏・第53首と第83首)、「何」(詩仏・第77首)、「難」(枕山・第79首)、「安」(枕山・第40首)のように、別字に改めている。また、「丘」は孔丘の諱、「玄」は清の聖祖玄燁の諱、「弘」は清の高宗弘歷の諱なので、「邱」(詩仏・第83首)、「絃」(枕山・第39首)、「元」(枕山・第53首)、「宏」(詩仏・第83首)と改めている。

(3)『東瀛詩選』卷十九に採録された大窪詩仏の詩は次の通りである。上段が『東瀛詩選』の採録順、()内が『詩聖堂集』の詩に巻数ごとの配列順を付したものである。

- ・第1首「春寒」(初編卷一)
- ・第2首「似白根天祐」(初編卷一)
- ・第3首「客夜」(初編卷一)

・第4首「秋海棠」(初編卷二)

・第5、6首「柳絮」其一、其二(初編卷二)

・第7首「題竹石道人畫竹」(初編卷二)

・第8首「睡鄉」(初編卷三)

・第9首「出郊」(初編卷三)

・第10首「閑遊」(初編卷三)

・第11首「萩花」(初編卷四)

・第12首「瀑布石」(初編卷四)

・第13首「閑遊」(初編卷五)

・第14首「漁家」(初編卷五)

・第15首「川中壘」(初編卷六)

・第16首「漁養」(初編卷六)

・第17首「題上田土屋生二松軒」(初編卷七)

・第18首「送森忠人之松前」(初編卷八)

・第19首「霜」(初編卷九)

・第20首「舟居」(初編卷十)

・第21、22首「寄題丈山先生詩仙堂先生歿已百五十年矣」其一、其二(二編卷一)

・第23首「桃園圖」(二編卷一)

・第24首「春草」(二編卷一)

・第25首「楊貴妃櫻」(二編卷一)

・第26首「夏晝」(二編卷一)

・第27首「送金剛王院」(二編卷一)

・第28首「雲」(二編卷一)

・第29首「宿神奈川」(二編卷一)

- ・第30首「題戸川君別業」(二編卷一)
- ・第31首「寄題三原妙正寺次韻賴杏坪」(二編卷二)
- ・第32、34首「山中襍題」其一、其三(二編卷二)
- ・第35首「三壘」(二編卷二)
- ・第36首「長圓寺」(二編卷二)
- ・第37首「盆山水」(二編卷二)
- ・第38首「蛩雨」(二編卷二)
- ・第39首「白藤花」(二編卷二)
- ・第40、47首「玉池精舍二十詠」(詩聖堂・荷花世界・瘦梅菴・艇樓・清淺池・納涼亭・綠雨亭・清菴步)(二編卷二)
- ・第48首「對山獨酌」(二編卷三)
- ・第49首「登慈雲閣」(二編卷三)
- ・第50首「森岡鶴立齋蘭室二君會都下諸名勝於百川樓賦此贈之」(二編卷四)
- ・第51、52首「弔雲泉墓墓在淨法寺後山」其一、其二(二編卷四)
- ・第53首「小島谷讀如亭山人題壁之作有感」(二編卷五)
- ・第54首「柏原」(二編卷五)
- ・第55首「荷珠」(二編卷五)
- ・第56首「柳」(二編卷五)
- ・第57首「獻小不二於大納言日野公并係之以詩」(二編卷六)
- ・第58首「鼓子花」(二編卷六)
- ・第59首「題溪山仙館圖」(二編卷六)
- ・第60、63首「烽火」其一、其四(二編卷六)
- ・第64首「偶成」(二編卷七)

- ・第65首「冬月閑行」(二編卷九)
- ・第66首「雙頭牡丹分韵」(二編卷九)
- ・第67首「謁機山公祠」(二編卷十一)
- ・第68、69首「東方東城翠竹亭集同諸子分韵」其一、其二(二編卷十二)
- ・第70首「林樾宇先生見送菊花一瓶云所自培養賦此奉謝」(三編卷一)
- ・第71首「冬日閑居」(三編卷二)
- ・第72、75首「哭內」其一、其四(三編卷二)
- ・第76首「庚寅元旦」(三編卷二)
- ・第77首「飲藤堂琴山大夫邸舍」(三編卷四)
- ・第78首「舟居」(三編卷四)
- ・第79首「對花不飲」(三編卷六)
- ・第80首「秋日山齋」(三編卷六)
- ・第81首「乙未首夏二日竹所牧野君白花庵賞花時君在崎農席上有詩書以傳遠粲」(三編卷八)
- ・第82首「幽事」(三編卷八)
- ・第83首「入江江民邀予與宏庵溪華槐庵閑齋竹潭諸君同泛湖賦卽事廿六韻」(三編卷八)
- ・第84首「題大石良雄肖像」(三編卷十)
- ・第85首「尚齒會」(三編卷十)
- ・第86首「秋殘」(三編卷十)
- (4) (A) 不適切な表現の訂正で指摘したように、「還雜」に修改されている。
- (5) (B) 厳格な対句への修改で指摘したように、「又」に

修改されている。

(6)『東瀛詩選』卷三十一に採録された大沼枕山詩は次の通りである。上段が『東瀛詩選』の採録順、(一)内が『枕山詩鈔』の詩に巻数ごとの配列順を付したものである。

- ・第1首「曉發箱根」(初編卷上)
- ・第2首「涼宵待月對古人齋席上分韻」(初編卷上)
- ・第3首「平久里」(初編卷上)
- ・第4首「野壘」(初編卷上)
- ・第5首「晚春書懷」(初編卷上)
- ・第6首「玉井冰鑑自柏崎至相攜飲墨川酒樓」(初編卷上)
- ・第7首「梅雨會九萬宅席上次懷之韻」(初編卷上)
- ・第8首「曉遊小西湖」(初編卷上)
- ・第9首「筑波山歌」(初編卷上)
- ・第10首「鴻臺歌」(初編卷上)
- ・第11、12首「歲晚雜感」其一、其二(初編卷上)
- ・第13首「過墨水某廢園」(初編卷中)
- ・第14首「歲晚書感」(初編卷中)
- ・第15首「三月十九日拉諸子遊墨水作長句」(初編卷中)
- ・第16、21首「中秋同橫山懷之縣晴峰中莖孔通遊墨水賞月于棹月樓夜半僦舟而歸」其一、其六(初編卷中)
- ・第22首「送彥之」(初編卷中)
- ・第23首「送星巖梁翁西歸」(初編卷中)
- ・第24首「十一月廿六日夜雪河野子貞見訪追次坡公聚星堂韻做禁體格」(初編卷中)
- ・第25首「載庵卽事」(初編卷下)

- ・第26首「小湖看荷花有感寄懷彥之」(初編卷下)
- ・第27首「中秋與昆溪湖山穀堂將爲觀月之遊適秋浦至遂泛墨水賦長句以記事」(初編卷下)
- ・第28首「三十生日酒間自詠」(初編卷下)
- ・第29首「暮春感興」(初編卷下)
- ・第30首「新秋同藤井士開橫山懷之飲小湖清容亭分韻」(初編卷下)
- ・第31、33首「中秋同懷之及田村考叔植村子順東橋買船到棹月樓是夜月色奇明夜半又登某樓分韻賦此」其一、其三(初編卷下)
- ・第34首「中元前一夕感懷」(初編卷下)
- ・第35首「戲作勸行樂歌」(初編卷下)
- ・第36首「昆溪詩鈔題言」(初編卷下)
- ・第37首「山寺觀早櫻用劍南梅花韻」(二編卷上)
- ・第38首「次韻答夢香老人」(二編卷上)
- ・第39首「中秋同穀堂香巖樂山泛舟墨水訪百花園薄暮抵棹月樓此夕月色清佳分袁倉山四海共傳斯夕好爲韻得四字」(二編卷上)
- ・第40首「至前看梅花」(二編卷上)
- ・第41首「仙山樓閣圖」(二編卷上)
- ・第42、44首「紅梅次坡公韻」其一、其三(二編卷上)
- ・第45首「暮春雨中書懷」(二編卷上)
- ・第46首「忽忽」(二編卷上)
- ・第47、48首「將遊房州舟發芝浦口號」其一、其二(二編卷上)

- 第49首「江上新秋」(二編卷上)
- 第50首「晚秋感懷」(二編卷上)
- 第51首「三月五日獨步墨堤賞櫻花」(二編卷上)
- 第52首「翫花戲述」(二編卷上)
- 第53首「寄題小松元鶴東涯舍」(二編卷上)
- 第54首「感事」(二編卷上)
- 第55首「冬日雜詩」(二編卷上)
- 第56、59首「東台看花雜詠」其一、其四(二編卷中)
- 第60首「清水」(二編卷中)
- 第61首「府中」(二編卷中)
- 第62、65首「茉莉詞」其一、其四(二編卷中)
- 第63首「茉莉詞」其二(二編卷中)
- 第64首「茉莉詞」其三(二編卷中)
- 第66首「秋日病中」(二編卷中)
- 第67首「偶感」(二編卷中)
- 第68首「二月十一日同香夢翁寬庭師鏡湖樂山遊新梅莊」(二編卷中)
- 第69、76首「梅花次張船山韻」其一、其八(二編卷中)
- 第77首「觀中將姬藕絲繡羅漢」(二編卷中)
- 第78、80首「秋感三首用吳穀人韻」其一、其三(二編卷中)
- 第81、85首「元日口號」其一、其五(二編卷下)
- 第86首「登行道山」(二編卷下)